

論理的な思考力を高める手立ての工夫

岡崎 知美
国語科 黒川 陸郎
端名 秀雄

1. テーマ設定の理由

平成 25 年度本校の研究主題は「課題を解決するための思考のあり方 ～よりよく思考するための手だての工夫～」である。国語科では、課題を解決するための思考を論理的な思考と捉え、平成 25 年度の研究テーマを「論理的な思考力を高める手立ての工夫」とした。

前年度は研究テーマを「論理的に伝え合う力を高める言語活動と評価」とし、「筋道を立てて、相手がより理解・納得して受け入れるような意見を述べることができる力（『論理的に伝え合う力』）」を育成する授業の研究を行った。各学年の実践から、全学年を通して「主張・理由・根拠」からなる論理的な思考の型については習得しつつあるという成果を得られた。

一方で、「伝え合う」ことに重点を置いた学習に関しては、活動自体が量的・質的に不足していたことを含め、十分な成果やデータを得られず、今後の課題として残った。いくつかの課題を整理する中で見えてきたのは、論理的に文章を読み取る力の差が論理的に伝え合う力に大きく影響しているということである。文章を正確に読み取る力・優れた文章の特徴を捉える力が十分に育たなければ、自身の表現に活かす力もまた培われない。つまり、「思考の型」の定着だけではカバーしきれない部分が、様々な文章を読み込む活動の中にこそあるということである。

「伝え合う」際の話し合い活動や文書による表現活動には、生徒自身のこれまでの経験（言語に触れる際の着眼点や言語による表現方法、使用言語の癖といったようなもの）等による個性が少なからず現れてくる。当然のことだが、それらの言語に関する経験は、国語科の授業等で訓練されたものと、そうでないものが混在している。経験が「思考」を方向付けたり、時には制限したりすることもあることを考えると、授業で題材を読むことまたその読み方自体が、論理的な思考を育む上で根底的な位置にあるとあらためて認識させられる。

これら平成 24 年度国語科研究の成果と課題を鑑み、今年度研究テーマを上記のように具体的な「手立て」を中心に設定したのは、論理的な思考の「型」として指導してきたものを、より実践的に、社会生活の個々の場面でも活用できるようにしていくためである。

副題として、第 1 学年は「根拠を明らかにして書く」、第 2 学年は「視点を変えて文章を読む」、第 3 学年は「文学的文章を批評的に読む」と設定した。前年度の課題から、学習段階に応じて研究の重点を見直したためである。つまり、第 1 学年は、根拠を明らかにするという論理的な思考の型を定着させ、書くことを主眼に置いた。第 2 学年は、複数の視点を持って様々なジャンルの文章を読み込むことで、個々の思考力を磨くことを目指した。第 3 学年は、より実践的に、実社会で求められる批評的な視点・思考に重点を置いて文学的文章の矛盾点を考える発展的な学習を行った。

2. 課題を解決するための思考のあり方について

(1) 課題設定のあり方について

1年生では、「書くこと」の観点で「根拠を明らかにして書く」学習活動を行った。

「蓬萊の玉の枝」では、この作品をきっかけにそれぞれが興味を持った古典について調べ、レポートにまとめた。そして、良いと思ったレポートはどこが良いのか、なぜ良いのかを考えた。また、レポートのテーマについて述べた文章を読み合い、説得力があると感じる文章はどのような書き方になっているかを考えていく活動を行った。古典分野の目標である「古典に興味・関心を持つ」をベースにしながら、書いた文章によって根拠が明らかになっているとはどういうことかを考えさせた。

2年生では、「論理的な思考力を高める手立ての工夫」を、「読むこと」の観点から進めていくことにした。「論理的な思考力を高める」には、様々な文章を分析的に読むことが有効だと考えた。学習指導要領には、「文章全体と部分との関係、例示や描写の効果、登場人物の言動の意味などを考え、内容の理解に役立つこと。」(第2学年2内容イ)、「文章の構成や展開、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをまとめること。」(同ウ)とある。いずれも単に記述内容の読み取りではなく、さまざまな視点から文章を読むことを示している。さまざまな視点を持つことは文章を検証的に読み進めることであり、それが定着してくれば、自身の思考の仕方にも好影響をもたらし、またその思考を表現することにも繋がると考えた。例えば、「筆者の主張」、「作品のテーマ」、「登場人物の心情」といった従来の読解授業の中心であったものを単純に読み取るばかりでは、論理的な思考力を「高める」には不十分である。分析的に読むことで、論の展開の仕方を捉えたり、読み取ったテーマや心情を検証したりする理論的な考え方が身に付き、自身の思考・判断・表現に役立つだろうと仮定した。

3年生では文学的文章を「読むこと」において、作品を「批評的に読む」学習活動を行った。前年度も「盆土産」(三浦哲郎)で同様の学習を行ったが、根拠が主観的なものも多く、客観性という点では今一つであった。本実践で扱った作品は「高瀬舟」(森鷗外)である。主題は大きく二つ、「足ることを知る(知足)」と、「安楽死」であるという受け止め方がされることが多い。

後半の「安楽死」に関わる場面で、主人公「喜助」が同心「羽田庄兵衛」に語る話の内容に関して、矛盾している点がないかどうかを考えさせ、矛盾していると考えられる点については根拠をあげて説明させた。その際の根拠は、なるべく教科書の記述もしくはそれから読み取れるものということにさせた。

(2) 思考の型について

1年生の思考力の指導については、まず「根拠を明らかにして書く」ための型の習得から始めた。レポート作成では、テーマについて大きく3つに分け(まとめ)て書く、テーマについての文章では、自分の意見についてその理由を3つ書く等ポイントを「3」とした。これらの習慣を付けつつ、説得力のある理由、根拠とはどういうものかを考えさせていくことにより、論理的な思考力を高めることができるのではないかと考えた。

2年生では、分析的に文章を読む方法として、読解の視点を意図的に変える学習活動を試みた。論説文(題材『モアイは語る』)の読解では、論の展開の仕方をトゥールミン・モデルを使って分析・検証した。基本的なモデル「D(根拠)-W(理由付け)-C(主張)」に加え、生徒にとって新たな視点として「R(反証)」を提示し、第19段落に着目させた。

3年生では、論理的な思考力を高めるための手立ての一つとして「客観的な根拠をあげて説明する」ということをポイントとした。文学的文章は生徒たちが興味・関心をもちやすい反面、主観的な読みをすることが多くなりがちであるが、その中であえて作品を「批評的に読む」ことによって客観的に作品を捉えることができれば、興味・関心を生かしながら論理的な思考力を高めることができる考えた。

(3) 思考の型をよりよく用いるための手だてについて

1年生では、書くときのポイントを3つに分け(まとめ)る、理由を3つ挙げる等、「3」を意識するという手立てを取り入れた。「3つ」という数は、表現する側にとっても、それを受け取る側にとっても、説得力のある理由の数として過不足無く適切である。本活動では、「3」を意識したレポートを作成する中で「根拠を明らかにする」という思考の型の定着を試みた。

また、互いの作品(レポート)を読み合うことで、「根拠が明らか」つまり「説得力がある」文章とはどういうものかを考えさせた。さらに、後の単元においては、共通のテーマについて自分の意見を根拠を明らかにして話し合うという活動を行った。

2年生では、基本的な思考の型を「根拠—理由付け—主張」とし、読解の補助となるワークシートを、筆者の論1つ1つをその論拠と関連付けて捉えられるように、生徒が図示しやすいものに工夫した。従来の序論・本論・結論といった文章構成に着目させるようなワークシートでは、文章全体としての結論を最終的な読み取りとして授業が終わると面白みのないものになってしまいがちであった。しかし、筆者の論の流れを「分類・関連付け」しながら読み深めていくことは、新たに筆者の意図や根拠・理由付けの妥当性などといった生徒にとってはこれまでの学習では気付かなかった部分に意識を注ぎきっかけになるものと考えた。また、表現活動においても、「根拠—理由付け—主張」を意識して短文にまとめることを練習させた。

3年生では、まず会話文の精読から、その中に潜む矛盾点を探し出すことを行った。その上で、なぜ矛盾していると考えられるかという根拠は、あくまで文章中の記述内容もしくはそこから判断できるものに限定して考えさせた。主観的な読解に陥りがちな文学的文章の読解において、批評的に読むこと自体が、作品に入り込む楽しさとは異なる斬新な楽しみ方(その手立て)となる。

また、批評的に考えたことを根拠を示しながら説明するという活動は、お互いの着眼点や根拠の捉え方を示すことでもあり、これも思考の幅を広げる大きな要因であると考えられる。

3-1 1年生の実践から

論理的な思考力を高める手立ての工夫 ～根拠を明らかにして書く～

国語科 岡崎 和美

(1) はじめに

1年生では、根拠を明らかにして書くことで論理的な思考力を高めようと考えた。中学1年生では、まだ理路整然と書くことは難しい。そこで、まず「根拠を明らかにして書く」ための型の習得から始めることにした。ポイントを3つに分け(まとめ)る、理由を3つ挙げる等、「3」を意識して書く活動を行っていった。「3つ」という数は自分にとっても相手にとっても記憶しやすく、且つ説得力のある理由を述べるのに最適の数であると考えたからである。同時に「根拠が明らか」、つまり「説得力がある」文章とはどういうものかも、互いの作品を読み合いながら考えていった。

(2) 実践の内容

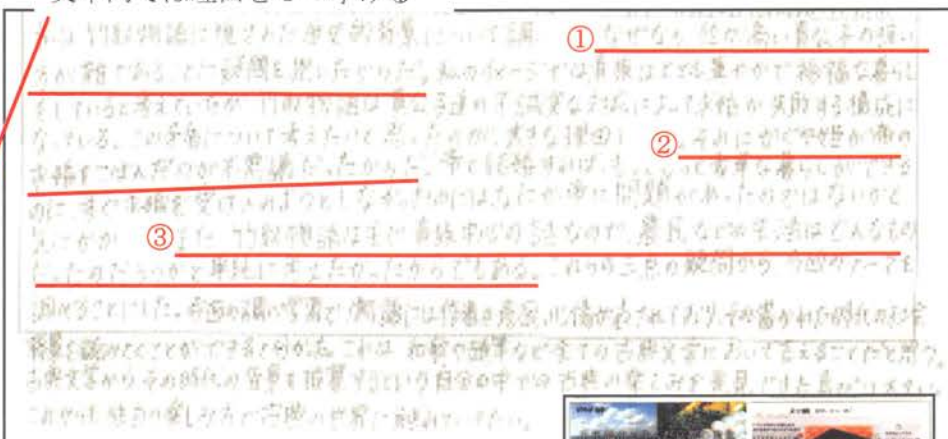
① 「蓬萊の玉の枝」

「蓬萊の玉の枝」をきっかけにそれぞれが興味を持った古典について調べ、レポートにまとめた。古典分野の目標である「古典に興味・関心を持つ」をベースにしながら、根拠が明らかになるよう文章を書き、根拠が明らかになっているとはどういうことかを考えた。



3つに分ける (まとめる)

文章内では理由を3つ挙げる



② 『「3つ」を探す』

新聞や雑誌の文章、広告から「3つ」の作りになっているものを探し、その効果を考えた。実際に3つのポイントで作られているものが多いので、効果的なのだと思感したのではないと思われる。

「3」というわかりやすさ、また内容構成のわかりやすさのコツについて考え、今後説得力のある文章を書くことに活かしていく。

(生徒の意見より)

- ①誰が何を行ったかが書かれている (要旨)
- ②その行ったことの一部を詳しく説明している (具体的)
- ③行った人の考えが示されている (気持ち)

この3つの構成はととても分かりやすく読みやすいと感じた。

- 商品などの広告によく用いられていた。3つだと印象が強い。そして「これは～です。また～な



所があります。さらに～なこともあります。」のような構成。3つ目のポイントで「さらに、こんな良いことも」のように「付け加える」役割をすると、お得な感じがする。授業でのプレゼンなどで活用したい。



- 記事や広告を探して、ほとんどが3段階で構成されていると分かった。それぞれに接続詞をつけるとより分かりやすくなると思った。
- 3つの理由だと読み取りやすい。また、1番目の理由に加えて2番目でさらに理由を述べていて、独立させておらず、つながりが見られる。
- 3つの理由で書かれていると、明確で、その興味がより深くなり、買おうとする好奇心が出る。4つ書かれているものも多かったのですが、3～4くらいがちょうどいいのではと思った。2以下は少なすぎて根拠がほぼない状態で抽象的になってしまう。5以上だと多すぎて情報がすべて正しいのかあやふやになってしまう。
- 説得力がある文章を読めば、「ああ～、こんな考え方もあったのか！」と自分の中でも違う考え方をすることができるようになる。違う考え方をすれば、「なぜこう考えるのだろう？」と関心が増す。こうして良いサイクルを生み出すことができると思う。

上のよう「広告や記事には「3つにまとめる」を意識したものが多い。3つにまとめるという技法に、どのような効果があるのか、和はいつか考えた。1つ目は「記憶に残りやすい」といふことだ。あれもポイントが頭と頭の中心を整理できると同時に納得しにくくという点で、「3」という数がちょうどよく、人間が記憶に残せる数であると思わされた。2つ目は「共感・納得しやすい」ということだ。3つの理由・証拠を書き、時に、まず1つ目の理由を書き、2つ目の理由で同じ結論に対する裏付けがくわしくなり、3つ目の理由でさらにくわしくなるからだ。早は、なるべく少ない情報で、かつ高い確率で、あるのが「3つ」であると思えたのだ。「3つにまとめる」として、リズムがでて、読んでいたり、聞いていたりして、印象に残りやすいと思う。例えば俳句には「五七五」というリズムがあり、音楽にも色々なリズムがある。また、「世界三大〇〇」や「日本三景」など、様々な所で「3」という数が使われている。「3つ」という数値の技法を自分でも使ってみよう。

Qの広告は3段落に分けて「しょうがはちみつ漬」について紹介している。1段落目はこだわりの製法について、2段落目は使い方・楽しみ方について、3段落目はまとめが書かれている。紹介①、紹介②、まとめの構成によって「しょうがはちみつ漬」の特徴が具体的に分かりやすい。この構成はよく見る「説明文」と同じ効果をもたらしていると思う。Bの記事は3つのポイントと、具体的な説明で内容が分かりやすくなっている。「社会人は朝の準備で勝負が、決まる」ということについて、3つのポイントで大きく分かれており、そのポイントを分けることによって、このように長文でも読みやすく理解しやすいように工夫されている。3つのポイントで分けるということは、読者の読むときの意欲を自然に高めるテクニックの1つだと思う。CとDの広告は、Bの記事と似ていて3つのポイントに分かれており、短文でその製品の特徴と良さを一目で理解できるように工夫されている。そのため3つのポイントが頭にスッと入ってきて、記憶に残りやすい。これらのことから、3(段落)つのポイントに分けることによって、内容が具体的に分かりやすく、それに伴って読むときの意欲を高め、内容が記憶に残りやすいという効果をもたらしていると考えられる。新聞や広告の発行者は、読者に少しでも読んでもらえるように、内容が分かりやすく頭に入りやすいように3つのポイントに分ける、という手段で工夫しているのだから、発行者の努力を少しだけ感じることができた。

③ 「調べたことを報告しよう」

単元「調べたことを報告しよう」での活動で、課題を取り上げた理由、調べた内容の項目をそれぞれ3つに分け、レポートを作成した。「蓬萊の玉の枝」では3つに分ける(まとめる)のが難しいという声があったが、ここでは比較的スムーズに書いていた。「さらに」、「また」、「そして」等の接続詞を使ってつなげていく生徒もよく見られた。

コンビニエンスストアの店舗数とその分布

1. 課題とそれを取り上げた理由

私たちの身近には、たくさんのお店がある。その中でもコンビニは、店舗数やその種類が豊富である。私たちの住む石川県には、どれくらいのお店があるのかを知りたいと思った。その目的を全国に広げるとどうなるのかについて、調べようと思った。また、コンビニの種類も変化しているため、今のどのようなお店が主流になっているのかを知りたい。

この活動の目標は「グラフや表を効果的に使う」であるが、テーマである「3つに分ける」も取り入れ、作成した。



④「自分の考えをまとめる」

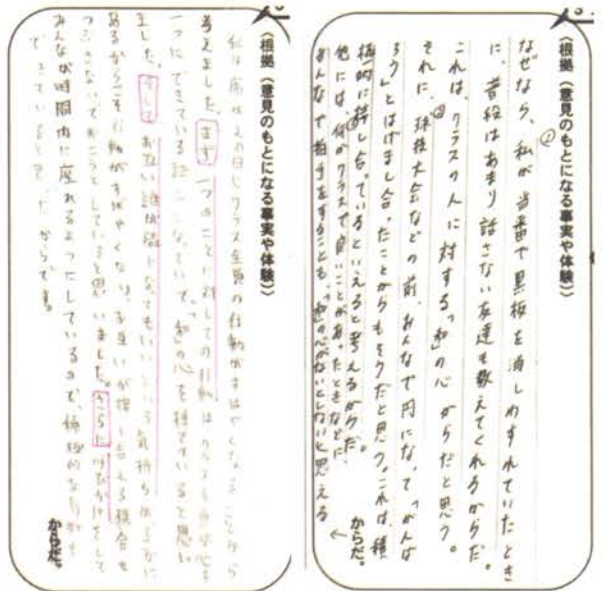
単元「話題をとらえて話し合おう」(光村)の授業の中に「自分の考えをまとめる」場面がある。話し合い活動の単元だが、書いてまとめる活動に重点を置いた。自分の意見の根拠を3つ挙げて説得力を持たせ、それをもとに話し合いを行った。一年生が終わりに近づいてきた時期であったので、課題は「クラス目標は達成できたか」にした。身近な話題であり、自分の意見を伝えたい気持ちも強く、説得力のある意見にしたいという様子が見られた。

根拠の例

このクラスの目標は「お互い『和』の心を持って積極的に接しあえるクラス」。複数の言葉が入った目標のため、それらを3つに分ける生徒がほとんどだった(他のクラス目標も同様)。課題の性質上、具体例を挙げて説得力を持たせることができていたが、「明るいから」「何となく〇〇な雰囲気だから」という理由を書く生徒もいた。班ごとの話し合いの後の発表では、どの班も具体例を挙げ、それなりに説得力のある根拠になっていた。

(生徒の意見より)「説得力のある意見」とは……

具体例を挙げるだけでは、意見の説得力がないうように感じた。
 具体例を踏まえた上で、自分はどのように思ったのかというように、
 自分の意見をしっかりと述べることで大切だと思った。
 また、解決策を発表する時に「意識をもつ、や」「責任をもつ」で行動する。
 といった気持ちの面だけでなく、その気持ちを引き出すためには、具体的なた
 びの取り組みをすれば良いのかという案を出す。より分かりやすく、より説得力
 があると思った。



説得力のある意見だと思ったのは、次に挙げる3つのことと関係がある。
 ①具体的事実を挙げて。
 ②数字を出す。
 ③①②の理由を言う。
 より分かりやすいのは、とてしなくで、説得力のある意見が書かれていた。小
 さい「る」は、説明がとてしなくとてしなくだと思える気がした。

- ・話が矛盾していない。
 - ・根拠を具体的にしたり、共感しやすい身近な例を出したりする。
 - ・具体例や改善策をきちんと入れている。
 - ・悪いことばかりや良いことばかりを集めた逆論のない意見は説得力がなかったと思う。逆論も示した上で、それに対する適切な解決策を伝えるものに説得力があった。
 - ・前の意見と比較した意見が説得力があると思った。なぜなら、よりその意見のいいところが明確に分かるからである。
- 具体例の効果を挙げる生徒が多かった。さらに、プラスアルファの要素を挙げてくる生徒もいた。

(3) 今後の課題

だんだんスムーズに3つに分けられるようになってきたと感じる。また、とにかく3つに分けるだけの状態から、どんな内容だとわかりやすいかを考え、意識する状態になってきた。しかしこれはまだ実際に書くときに活かしきれていない。今後練習していきたい。なお、これまでは分けやすいようにレポート形式で書く活動が多かったが、今後は長文にも取り組んでいきたい。ただし、型はあくまでも初めの手がかりである。これに終始することなく、自由に思考できる力を付けさせたい。

論理的思考を高める手だての工夫 ～根拠を明らかにして書く～

国語科 岡崎 和美

✓ 実践の概要

型の習得……ポイントは「3」。自分の意見について3つの理由をつける。

例

1. 意見
2. なぜなら～(理由①)
3. それに～(理由②)
4. また～(理由③)

どのような「理由」だと相手が理解・納得しやすいか考える。

活用していく

✓ 現在の活動

『蓬萊の玉の枝』(竹取物語)から広がる古典についてのレポート

『あまた』 - はるかなる時をこえて -

『蓬萊の玉の枝』の学習をきっかけに自分が興味・関心を持った事柄について

読んだ人が古典に興味・関心を持つように

テーマについて大きく3つに分け(まとめ)て書く

どこが良いのか、なぜ良いと感じるのか考える

- ・調べたこと・資料+自分の考え。自分の考えを明らかに。
- ・理由が的確に書かれている。
- ・項目に関連性をもたせる。それをさまざまな面から見たり集中的に深く掘り下げたりする。
- ・興味を引くタイトル。サブタイトルもつけたほうが内容がわかりやすい。
- ・数字、引用などを効果的に使うと説得力がある。……等

* テーマ設定について。「型」を意識して。

✓ 今後の活動

「理由3つ」の文章について考える

* の文章について分析

- ・ どういうところが上手なのか
- ・ なぜ上手だと感じるのか

相手が理解・納得しやすい「理由」とは

- ・ 意見とつながっている
- ・ 客観的なデータ(→根拠)……等

文章を書く

でてきたものを活用して

3-2 2年生の実践から

論理的な思考力を高める手立ての工夫 ～視点を変えて文章を読む～

黒川 陸郎

(1) はじめに

読解の授業が大半を占める国語科の授業では、「論理的な思考力を高める」手段として、「読むこと」の観点からのアプローチはどうしても外せない。しかし、従来のただ文章の内容を正確に読むことや、登場人物の心情を推測するような授業では、論理的な思考力はなかなか身に付かない。

では、論理的な思考力を高める読解とはどのような読解か。視点を持って文章を分析的に読み進めることがそれではないかと仮定した。様々な視点を持って文章を読むことで、一面的な文章の捉え方を脱却できる。また、思考の幅も広がると考えた。さらに、そのような読解を繰り返す中で、論理的な考え方が身に付き、それが自身の表現にも活かされると考えた。

(2) 実践の内容

平成25年度は、視点を変えて読む題材として、論理的文章「モアイは語る」(光村図書2年)と「走れメロス」を選んだ。

「モアイは語る」は、モアイを作った文明がなぜ滅んだかを解き明かしていくことから、現代文明の存続という大きなテーマを読者に訴える文章である。文章構成に着目するだけでは捉えられない部分として、「疑問—解答—解説」といった筆者の語りのような表現、1つ1つの現象を論理的に解説しまたそこから新たな疑問を投げかけるという段落ごとの関連性などが挙げられる。それらを分析的に読み取らせるために、「根拠—理由付け—主張」という型に加えて「反証」という視点を紹介した。第19段落・第4文がそれであるが、ほとんどの生徒が筆者の反証を発見することができた。

また書くことの学習活動として、筆者の意見に対する意見文を書かせたが、論の展開の巧妙さを再確認したという内容のものと、反証から筆者の言う「方策」を模索しようという作文に二分された。

「走れメロス」では、各登場人物(セリヌンティウス、ディオニスなど)と作者(太宰治)の視点で読むことを試みた。もちろんメロスの心情の変化についても押さえたが、その際、単に「心情」とするのではなく、「感情を表す言葉」を生徒一人ひとりが考え、その言葉(感情)を基準にメロスの心情の変化を追った(心情曲線)。基準を設定することで、注目する語句にも差違があり、また曲線も変化した。

いくつかの視点で読み進めるうちに、地の文の中でメロスの呼称の変化に気付く生徒や、矛盾点を指摘する生徒も現れた。折しも、インターネット上で「メロスは走っていなかった」という結論を書いた中学生の研究が話題となり、現代科学的見地から文学を面白く検証しようとする他の矛盾点を探し出そうとする生徒もいた。しかし、大半の生徒はあくまで文学作品を純粋に読み深めたい、文学的表現をそのまま捉えるようなことはしないという意識が強く、どの視点からのアプローチでも作品のテーマに迫ることができることを確認した。

【感情を表す言葉と曲線の特徴(生徒の例)】

- ・ メロスの正義感 → 膝をついた後もプラスの部分がある
- ・ メロスのやる気 → 山賊を打ち倒す場面が頂点
- ・ メロスの勇者度 → はじめの暢気さを出しているところで低い
- ・ メロスのモチベーション → 試練ごとに山と谷

論理的な思考力を高める手立ての工夫

～視点を変えて文章を読む(2年生)～

国語科(2年生担当)黒川 陸郎

1. 研究仮説

一人ひとりの「論理的な思考力を高める」には？

「型」を習得しても、個人差が埋まらない！

「型」だけではなく、「手立て」の工夫が必要！

「さまざまな文章を、視点を変えて、分析的・検証的に読むこと」を試みる。

論理の展開の仕方を、別の視点から分析する！
(手立てとしてのトゥールミン・モデルの利用)

視点を変えると…



2. 実践計画

教材	光村図書「国語2『モアイは語る－地球の未来－』(論説文)
学習課題	説得力ある文章の論理展開の仕方を解き明かそう(4/5)
思考の型	要約する, 関連付ける, 整理する, 批判的に見る
手立て	トゥールミン・モデルを利用したワークシート, 展開図

第1時 モアイが語る「地球の未来」とは？(筆者の主張を捉える【従来の読解】)

第2時 なぜ、そう言えるのか？(論拠と文章構成を捉える【従来の読解】)

第3時 なぜ『モアイは語る』は説得力があるのか(トゥールミン・モデルを使った読解【別の視点】)

第4時 説得力ある文章の論理展開の仕方を解き明かそう(R(反証)を見つける, 展開図の作成)

第5時 論の弱点を捉えよう(筆者の論に対する意見文【発展】)

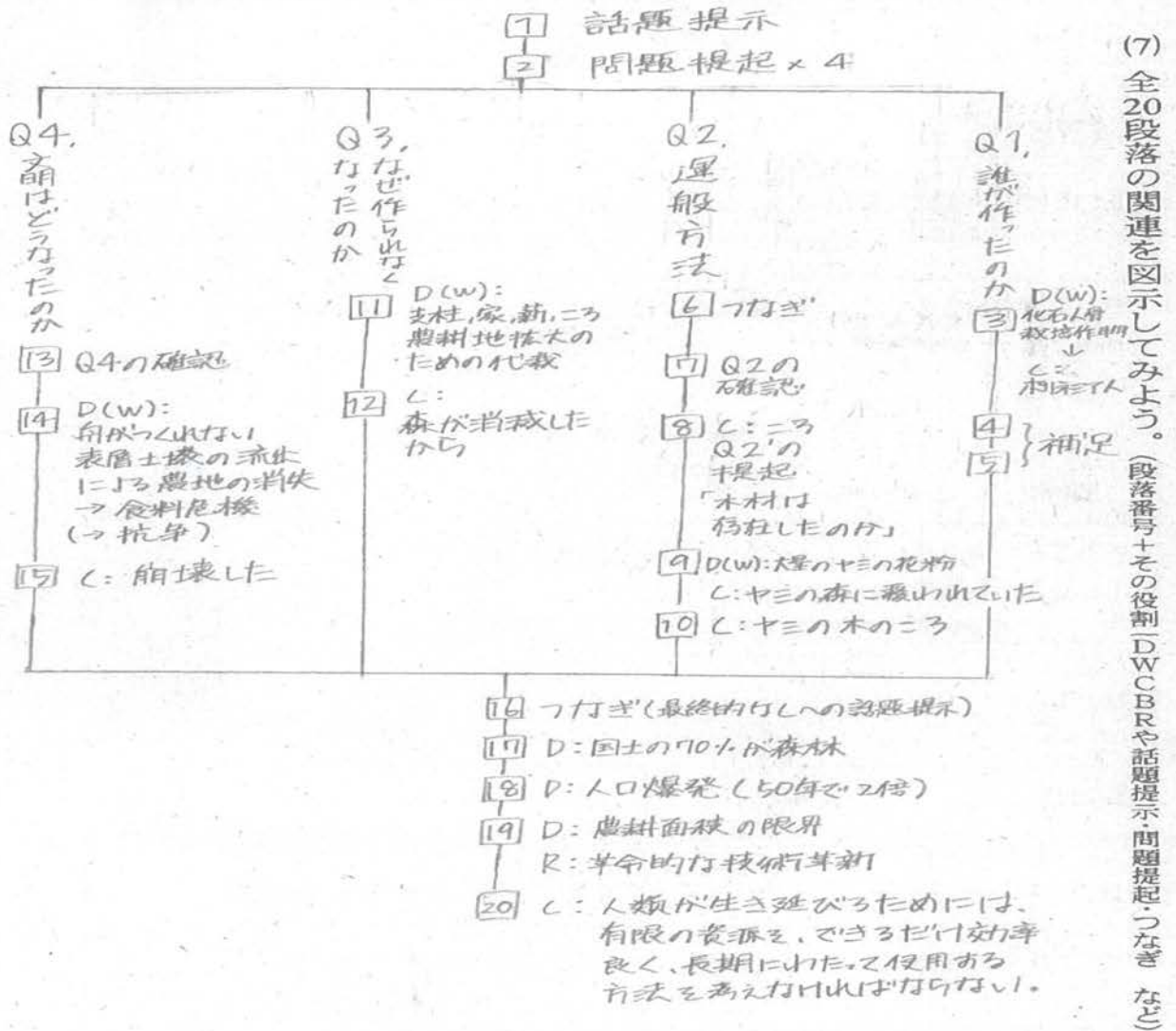
3. 成果と課題 ～今後の取り組み

☆文章構成(序論・本論・結論)の捉え(従来の読解)だけでは見えてこなかった論説の仕組みが理解できた。

☆トゥールミン・モデルを使うことで、筆者が投げかけている課題や論の弱点が現れている部分に気づくことができた。

☆批判的に見ることで、かえって筆者の論が極めて理に叶っていることを再確認できた。

◆今後は「批判的に見る」視点を身に付け、そこから自身の考えを発信する学習活動とその「手立て」を模索していきたい。



このワークシートでは、「質問→答え」という筆者の流れるような文章表現を、見出しを付けながらまとめられている。また、第①段落から第⑮段落に至る論の展開の仕方が、4つの「DWC」によって論理的に構成されていることも捉えられている。第⑰段落で筆者が自身の主張(C)を論じるにあたっては、第⑭段落および第⑮段落、そして第⑯段落が、その直接の根拠(D)であることを捉え図示している。

また「Q3」と「Q4」の結論(C)が、第⑭段落から第⑯段落に書かれたこの文章全体の根拠(D)のモデルとして記述されていることを、第⑬段落を「つなぎ」という形で収束的に表している。

さらに、第⑯段落の反証(R)は、筆者の論を限定するもの(「～でない限り…」)でありながら、筆者の主張の論理性をより強固なものにする一文であることに気づいていることを示している。

(3) 考察

本文は、見方を変えれば「革命的な技術革新」を見出すことができれば筆者の主張は崩れるとも言えるが、人類が生き延びる道として筆者が述べる「有限の資源を効率よく長期にわたって利用する方策」と対になるものとして読者に敢えて示した課題とも捉えられる。このような視点を加えることによって、次時の作文の授業では、生徒たちは自分なりに人類の未来を考えたさまざまな意見文を書いていた。

視点を定めることで、細部に至る著者の意図に気付いたり、自分の意見を持つ際の切り口を見出したりすることができたようである。

(1) はじめに

平成24年度は、三浦哲郎の「盆土産」（光村図書2年）の学習指導において、文学的文章で論理的な思考力を育成するというねらいで、次のような三種類の課題を設定して文学的文章の「クリティカルリーディング」を試みた。

- ①登場人物について考えさせる課題
- ②作品の題名について考えさせる課題
- ③作品の主題について考えさせる課題

平成25年度は、森鷗外の「高瀬舟」（光村図書3年）の学習指導において、作品中の登場人物の会話文に注目させ、その話の矛盾点を考えるという実践を行った。

(2) 実践の内容

「高瀬舟」は、主人公喜助が弟殺しの罪で流刑に処せられ、島に送られる舟の中で、役人の羽田庄兵衛と自分の身の上について対話をするという話である。その話の中で、喜助が弟殺しの状況を語る部分について、その話の内容に矛盾しているところがないかどうかを考えさせようとしたものである。生徒たちが指摘した矛盾点は、大きく分けて次の三点についてのものであった。具体的なものととともに、以下に列举する。

①喜助に関するもの

- ・「どうしてあんなことができたのかと、自分ながら不思議でなりませぬ。全く夢中でいたしましたのでございます。」
- ・「どうしたのだい、血をはいたのかい。」
- ・「私はなんと言おうにも、声が出ませんので……。」
- ・「ぼんやりして見ておりました。」
- ・「そばへ行って……そばへ寄ろうといたすと……。」
- ・「黙って喉の傷をのぞいてみますと、なんでも右の手に剃刀を持って、横に笛を切ったが、それでは死に切れなかったので、そのまま剃刀を、えぐるように深く突っ込んだものと見えます。」

②弟に関するもの

- ・「目で私のそばへ寄るのを止めるようにして……どうぞ手を貸してくれ……。」
- ・ものを言うことができませぬ→ようようものが言えるようになった→しゃべり続ける
- ・「医者がなんになる。」
- ・「歯はこぼれはしなかったようだ。」
- ・剃刀を自分で抜かなかった。
- ・晴れやかに、さも嬉しそうに……。

③婆さんに関するもの

- ・ばあさんが家に入ってきたこと。
- ・ばあさんが暗がりでも事件を目撃したこと。
- ・「私の内から締めておいた表口の戸を開けて、近所のばあさんが入ってきました。留守の間、弟に薬を飲ませたり何かしてくれるように、私の頼んでおいたばあさんなのでございます。」

④その他

- ・貧しいとはいいいながら、食べ物などを買っているし、家に剃刀がある。

・家の構造がどうなっているのかわからない。

上記のような矛盾点について生徒たちによる根拠と矛盾していることの説明は以下の通りである。根拠は文章中の記述内容もしくはそこから判断できるものを挙げさせた。

①喜助に関するもの

- ★「全く夢中で」と言っている割には、弟を殺したときの状況を事細かに覚えている。
- ★「全く夢中で」と言っているのに、ばあさんが入ってきたことはよく覚えている。
- ★「弟の言ったとおりにしてやらなくてはならないと思いました。」とも言っているので、十分考えて行動しているから不思議ではない。
- ★大量の出血もあり、医学的な知識を持っていない喜助にこのような細かい判断はできない。
- ★喉を刺しているのがわかっているのに、「どうしたのだい、血をはいたのかい。」と尋ねるのはおかしい。
- ★弟が左手でしっかりと顎の下を押さえているのに、どうして傷が見えたのか。

②弟に関するもの

- ★このようなことは、傷が快復しない限り無理である。また、「笛を切ってえぐるように深く突っ込んだ」とあるが、その場合声帯も傷つくので、しゃべることはできないはずだ。
- ★喉に剃刀が刺さった状態で話しているにしては、内容が冷静すぎる。
- ★余力があるのに、自分で剃刀を抜かなかったのは不自然。
- ★自分の喉に刺さった剃刀の状態を「刃はこぼれはしなかったようだ」とわかるはずがない。

③ばあさんに関するもの

- ★ばあさんは喜助が留守の間に来ることになっている。しかし、ばあさんが来たのは喜助がいつものように家に帰ってきてからであり、いつもと来る時間が違うことになる。
- ★「内から締めておいた…」ということは、施錠されていたということなのに、どうやって入ってこられたのか。
- ★ばあさんは暗がりでは家の中の様子が確認できていないはずなのに、どうして奉行所に状況を伝えることができたのか。

④その他

- ★喜助やばあさんはどこから家に入ったのか。内から締めておいた表口からは入って来られないはず。

(3) 考察

本実践でのねらいは、「根拠を明確にして矛盾点を説明させる」というものである。文学的文章はストーリーを素直に追って読み進めることがほとんどであるが、登場人物の会話文の矛盾点を考えるという少しひねくれた発想で根拠を添えて説明させてみた。何も指示せずに読ませれば納得してしまいそうな描写の部分であるが、そのような視点で改めて眺めさせると、確かにそれでは理屈が通らないと思われる箇所があることに気づき、生徒たちも複数の矛盾点を指摘することができた。

「知足」・「安楽死」などという言葉で語られる主題についても、喜助の話に明らかな矛盾があるとすると、「知足」という言葉で説明される喜助の笑みも、罪をごまかした不敵な笑みというように考えられ、主題そのものも変わってくることになる。

視点を変えた読みは、作品に対する新鮮な興味・関心を生むことにもつながる。今後も文学的文章の指導の中に論理性を追求するような指導を取り入れたいと考えている。

参考文献 「高瀬舟」の真相—小説史上、最も読者を欺いた殺人犯— (広島大学 柳澤 浩哉)

論理的な思考力を高める手立ての工夫

～文学的文章を批評的に読む「高瀬舟」(森鷗外)～

国語科 端名 秀雄

★「喜助」の証言の中から矛盾点を探し、根拠を挙げて説明しよう。

弟の様子に関すること

「ものを言うことができません
→ようようの言えるようになったのでございます」
→しゃべり続ける

★このようなことは、傷が快復しない限り無理である。また、「笛を切つてさぐるように深く突っ込んだ」とあるが、その場合声帯も傷つくので、しゃべることはできないはずだ。

★喉に剃刀が刺さった状態で話しているにしては、内容が冷静すぎる。

ばあさんの様子に関すること

「私の内から締めておいた表口の戸を開けて、近所のばあさんが入ってきました。留守の間、弟に薬を飲ませたり何かしてくれるように、私の頼んでおいたばあさんなのでございます。」

★「内から締めておいた…」ということは、施錠されていたということなのに、どうやって入ってこられたのか。

★ばあさんは喜助が留守の間に来ることになっている。しかし、ばあさんが来たのは喜助がいつものように家に帰ってきてからであり、いつもと来る時間が違うことになる。

その他

- ★ばあさんは暗がりで家の中の様子が確認できていないはず。
- ★喉を刺しているのがわかっているのに、「どうしたのだい、血をはいたのかい。」と尋ねるのはおかしい。
- ★喜助に余力があるのに、自分で剃刀を抜かなかつたのは不自然。
- ★弟が自分の喉に刺さった剃刀の状態を「刃はこぼれはしなかつたようだ」とわかるはずがない。
- ★喜助はどこから家に入ったのか。内から締めておいた表口からは入っていないはず。



喜助自身に関すること

「どうしてあんなことができたのかと、自分ながら不思議でなほせぬ。まったく夢中でいた(私)なのでございます。」

- ★「全く夢中で」と言っている割には、弟を殺したときの状況を事細かに覚えている。
- ★「全く夢中で」と言っているのに、ばあさんが入ってきたことはよく覚えている。
- ★「弟の言ったとおりにしてやらなくてはならないと思いました。」とも言っているので、十分考えて行動しているから不思議ではない。

「黙って弟の喉の傷をのぞいてみますと、なんでも右の手に剃刀を持って、横に笛を切つたが、それでは死に切れなかつたので、そのまゝ剃刀を、さぐるように深く突っ込んだものと見えます。」

- ★弟が左手でしっかりと顎の下を押さえているのに、どうして傷が見えたのか。
- ★大量の出血もあり、医学的な知識を持っていない喜助にこのような細かい判断はできない。

4. 成果と今後の課題

1年生では、「根拠を明らかにして書く」活動の中で意識した「3」という数（手立て）が定着してきた。まとめや、取り上げる根拠を3つに分ける場面などでスムーズに学習活動を行う姿が見られた。また、分けた内容についても吟味できるようになってきたと感じられる。具体的には、どんな内容だとわかりやすいかを考えたり、意識して取捨選択や推敲したりすることができてきた。

しかし、まだ様々な形式の文章を書くことに対応できているとは言い難い。内容を「3」つに分けたり、項目立てがしやすいレポート形式で書く活動が多かったこともあるが、今後レポート以外の形式の文章にも取り組ませていきたい。今回の研究で取り組んだ「型」は一つの手がかりであり、ここから自由に思考できる力・表現できる力を身に付けさせたい。

2年生では、1年時に型として定着を図った「根拠・理由・主張」を様々な文章の読解で応用し、さらに視点を変えて読むという試みを行った。説明的文章の読解では、反証という視点を持つことで、筆者の論の内容だけでなく、論理性そのものを再確認したという生徒が多かった。また、文学的文章の読解では、登場人物の言動から作者の細かい仕掛けに気付き、より面白く作品を読み深めることができたなどプラスの感想がほとんどであった。

深く読み込む力がある程度ついてきた一方で、それを自身の表現に活かすということについては、まだまだ課題が残った。抵抗なく自身の表現（主に作文）に取り入れることができる生徒もいるが、書き慣れない表現にとまどい文章の一貫性を見失ってしまうもの、自分で考えた反論を論破できていないものなどもあった。優れた文章の特徴を捉え、自身の表現に充分活かしていくまでには更なる訓練が必要であろう。

3年生では、前年度に取り組んだ文学的文章のクリティカルリーディングを継承し、会話文の矛盾点をつくという批評的な視点を加えた読解に取り組んだ。読解力の優れた生徒は複数の矛盾点を見つけ出していた。また、その検証を、読み取った内容（記述）をもとに行うことができた。さらに、その内容を生徒同士で意見交換をするというたいへん活発な学習活動が展開された。作品のテーマを根底から覆すかもしれない新たな視点に、生徒の学習意欲が一層喚起された様子である。

批評的な読解から、思考・判断・表現という流れを、一つの題材から作り上げることができたものと考えられる。また、「説明」についても、接続詞や文末表現を含め言葉を選んで表現するよう工夫する生徒が多く見られた。

学習段階に応じて、論理的表現の型、様々な読解の方法、批判的な視点など今年度テーマとして取り組んできた各学年で身に付けさせたい力は一定の定着を見たものと思われる。

しかし、実社会においてすぐに応用が効くかと言われると疑問符を付けざるを得ない。「型」としての定着から、表現における応用を行ってなお、それらが今後どんな場面で役立てられるのか教師側からも見えない部分である。

論理的に物事を読み取り自身の基準をもって判断する力、相手意識を持って自分の考えを伝え合う力、状況に応じて使い分けられる語彙力など、今後はより実践的な、将来役に立つと実感できる国語の力を身に付けさせる方策や具体的な手立てを講じていかなければならない。